

小説は祈りのようなもの

なんぼた
難波田 節子

読書人口が減って本が売れなくなっている昨今の風潮を、「文学の衰退」と称する人がいる。が、私が文学に興味を持ち始めた十代の頃は、読みたくても本が手に入らない時代だった。毎日暗くなるまで学校の図書室に入り浸って、文学全集を片端から読んだものである。

そんな高校生の私が、読む側から書く側に移ったのは、ある小さな雑誌との出会いが切掛けである。B6版 六四頁、白い表紙に「いづみ」と書いてあるだけの見栄えのしない雑誌だが、巻頭言は安倍能成、十人ほどの監修同人はみな大学の教授だった。戦災で父親と家を失くした貧しい母子家庭の子には、価格が三十円というのが何よりの魅力だった。

その雑誌に読者文芸欄があったので、短い作文を送ってみたところ、早速掲載されて、いくらだったか忘れたが、原稿料までもらえたのだ。生まれて初めて自分の書いたものが活字になった嬉しさで意欲がわき、頻繁に投稿しているうちに、編集部から誌上対談や座談会への誘いを受けるようになったのである。編集室で、主幹の故高瀬兼介先生と協力者の青木生子先生（当時日本女子大学教授）に、悩みや愚痴を聞いていただけのも楽しみだった。このお二人はその後、「いづみ」発行の傍ら、勉学の意味はあるのに経済的理由で進学できない若者に、大学の講義録を送る通信教育まで始められたのである。その熱意に賛同して講義録を提供してくれた教授たちがあってのことだった。

だが、その教授たちも、全国から送られて来る受講生のレポーターを読まされるのはさぞ大変だったろう。そして幸せなことに、「いづみ」十周年記念号が出る頃は、私も編集部の片隅に席を頂いたのであった。

私の小説はそんな環境の中で生まれたのだが、後に「再会」という小説が秋田の魁文学賞で選奨を受けた時、「一言で言う」と、あなたにとって小説とは何なのですか」という問いに、「祈りのようなものです」という答が咄嗟に口をついて出たのは、読者の胸を打つものを書きたいという純粹な願いからであった。この作品が、同じ年にやまなし文学賞の佳作を受けた「居酒屋やなぎ」と併せて出版されると、面識のない人から好意的な感想が送られて来たりして、何とか読者の心に届いたかなという喜びを実感できた。その本に、魁文学賞の選者だった高井有一先生が「ここには一つの人生が量感を伴って描かれている」という跋を書いてくださったのもありがたかった。

三人の子の母親になった私が、子育てのための長いブランクから這い出したのは、末の子が小学校を卒業した時である。子供たちの作文の出版が契機だった。随所に私のコメントを挟んだこの「三つの小さな足跡」は、学校の先生方の推薦を得、新聞にも紹介されて、三版を重ねることができた。私が最初に師事した故久保田正文先生も、「作家、主婦、キリスト者という三つの個性を矛盾なく共存させている」と、評価してくださった。

故秋山駿先生は、生前法政大学大学院の私小説研究会のインタビュで、「まず第一に自分という人間を知ることだ」と話しておられる。「自分の心の中で神の問題を感じ、殺人の問題を感じ、あるいは正義、不正義についての基準をしっかりと持つことが大切だ」と。私が属していたプロテスト文学者の会

「たね」では、故高堂要氏が元気でおられた頃からずっとドストエフスキーを読んでそのことを学んで来たのを思い出す。

しかし今の私が書きたいのは、罪人でなく、真剣に生きる人である。誰に認められなくても、報われなくても、愚直に誠実に生きる人間を描きたいと思う。そしてまた、そういう生き方をしている人の心に響く作品を書きたいと思っている。

この年になるまで書いて来た作品は結構な数に上るが、その一つ一つに力を貸してくださった人たちの顔が思い出される。

例えば、シェバの女王の伝記小説『アラビアの白い薔薇』を書いた時は、故尾崎安先生が野上豊一郎の著書を紹介してくださり、薮勇造先生は自著『シェバの女王』（山川出版）を、故毛利和夫先生は川又一英の『エチオピアのキリスト教』（山川出版）を贈ってくださった。また伝説の女王に、エチオピア初代の王メネリクの母親であると言われるイエメンのビルキス説を選んだのは、故小川国夫先生が背中を押してくださったからである。出版社や新聞社からお借りした図版の取り扱いや解説の入れ方などを教えてくださったのは勝又浩先生である。そうしてできた本に、富岡幸一郎先生が温かい解説を書いてくださった。

私はいつも、作品は自分の子供だと人に言っているが、こんなに大勢の方の支援があって生まれたのは、本当に幸せな子である。お礼らしいことは何もできないが、良いものを書くことだけが恩返しだと思って来た。が、それも十分に果たせないでいる無力な自分が不甲斐ない。うろうろしている間に何人もの恩人が故人になってしまわれたのも寂しい限りである。

小説は祈りだという私の思いは今も変わっていない。文学は言葉の芸術だと考えている。私の場合、書く時は夢中だが、書き終って振り返ると、そこに私を支えてくれた大きな手を

感じるのだ。私が自力で書いていたのではなく、書かされていたのである。神が与えてくださった言葉を、不器用ながら使わせていただいていたのだ。

現在は、勝又浩先生のご指導を受けながら季刊「遠近」という同人雑誌を出している。この紙面を足掛かりにして、同人たちが伸び伸びと自己を表現し、人生を綴ってほしいと願っている。

(仲田達男聖書研究会ミルトス会)